

臨床医のための症例プレゼンテーション AtoZ [英語 CD 付]

齋藤中哉(著) Alan T. Lefor(編集協力)

このたび、自治医科大学客員教授であり東京医科大学の総合臨床科教授でもある齋藤中哉教授の執筆と、自治医科大学教授の Alan T. Lefor 教授の編集協力により、『臨床医のための症例プレゼンテーション A to Z』が医学書院から出版された。これには英語の CD が付いている。

本書の内容は、2003 年以来、ハワイ大学の医学教育フェローシップ・プログラム・ディレクターをされていた齋藤中哉氏が『週刊医学界新聞』紙上において 2004 年から 1 年間、12 回にわたって連載した「英語で発信！ 臨床症例提示——今こそ世界の潮流に乗ろう」に、大幅な加筆・修正を加えたものだ。連載は、カンファレンスにおける症例提示 (case presentation) の実例を分析し、テキストとして教育的、効率的な症例の提供の仕方を教えてくれる、読者にあたかも米国での症例検討会に出席しているような感を与える記事であった。

私は、日米の臨床医学にあるレベル差の大きな原因の 1 つは、米国でみるような効率的なカンファレンス進行の技が日本にないことにあると考えてきた。だから、本書が出版されたことの意義は大きいと思う。しかも、本書では症例呈示の日本語の例文の多くが英文に訳され、CD に収録されているため、これを聞くと、まるでアメリカの医学教育機関でカンファレンスに出席しているような臨場感を持つのである。

章を追って内容を示すと、第 1 章は症例の提示の技に必要な基本的な点を取り上げられている。第 2 章には症例を提供するうえでの理論が述べられ、主訴の取り上げ方、次いで現病歴、既往歴、家族歴、生活歴を

とる要領が示されている。次に診察の順序として、診察の技法、検査結果の取り上げ方、最後に要約の書き方が示されている。また POS によるプロブレム・リストとそのアセスメント、治療検査のプランの書き方が示されている。

続いて、病歴診察所見や検査成績を口述する速度や発音、音調の取り方、そのときの視線の向け方や姿勢や身振りについて、さらに差別用語を使わない注意が述べられている。

以降の章は、より具体的な実践について述べている。たとえば第 3 章には、症例提示の技やコツが分類して述べられており、第 4 章には症例提示の練習法やスライドの使い方が述べられている。第 5 章には症例提示の指導上の 7 つのポイントが述べられており、第 6 章には英語での口述の仕方や要領が述べられている。

以上のように本書は、症例呈示の理論から実践までが万遍なく述べられているが、表現は平易で、指導医と会話しているようなムードで読むことができ、内容を納得して自己訓練すれば、症例呈示能力、ひいては臨床的実力が高くなる爽快感が体験されるのである。

本書が生きたテキストとして医学生、研修医はもちろん、ナースやコメディカルにもよき学習書となることを信じて疑わないものである。

聖路加国際病院名誉院長・理事長
日野原重明

●B5 頁 248 2008 年

定価 3,990 円 (本体 3,800 円 + 税 5%)

[ISBN978-4-260-00278-3] 医学書院刊